

町の子供は町で育てる

「3つの合言葉」元気・学び・会話

滑川町教育委員会だより

「学んでよかった町へ -チーム滑川での教育-」

AI時代に求められる学力とは？

新年あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願いいたします。

今回も、学校で学んでいる若い世代の人を想定読者に設定します。

「まことに小さな国が開化期を迎えようとしている」ではじまる司馬遼太郎の「坂の上の雲」ですが、「社会のどういう階層のどういう家の子でも、ある一定の資格を取るために必要な記憶力と根気さえあれば、博士にも官吏にも軍人にも教師にもなりえた」という一節があります。この時代は、記憶力と根気を示す方法としては、文字情報を読んで、ペーパーテストに鉛筆で答えを書くことが偏重されました。つまり、正解にできるだけ早くアクセスできる力を学力と捉えていました。現在でも、そのような学力観をもっている人が多いのではないのでしょうか。

ところで、今日、AI(Artificial Intelligence 人工知能)という言葉を目にしない日はありません。新聞主要5紙の元旦紙面には合わせて300近く登場したそうです(1月5日毎日新聞夕刊「近時片々」)。最近の株高もAIと半導体が牽引役となっているそうです。そんな中、学ぶ意味も揺らいできています。

1月6日(火)の読売新聞に慶応大学医学部教授の宮田裕章さんの言葉が載っていました。「産業革命以降、教育とは、青年期の限られた時期に知識や技術を習得するためのものだった。これは、卒業後は企業に勤めるという社会像の固定化が前提にある。数年前に生成AIが登場してこの前提が崩れ、教育は大きく変わらざるを得ないフェーズにきた」「AIは、知識や技術をひたすら蓄積し、情報を整理することが得意だ。今までは、知識を詰め込み、激しい受験戦争をくぐり抜けた人が社会で活躍できていたが、そういった人はAIが担う領域と差別化できない。社会の構図は大きく変容するだろう。そこで人間に求められるのは、『問いを立てる力』だ。何が大切かを感じ、新しい価値を定義することは人間にしかできない」宮田さんは、冒頭に紹介した明治以来の学力観からの脱却を訴えています。

『問いを立てる力』とは、どんな力なのでしょう。宮田さんは、「何が大切かを感じ、新しい価値を定義すること」と表現していますが、この言葉を聞いて真っ先に浮かんだのが中村哲さん(1946-2019)です。12月4日は中村さんの命日でした。亡くなって6年になります。医師であり人道支援活動家だった中村さんの実践は、その重要性を教えてください。中村さんは、パキスタンやアフガニスタンで医療活動を行っていました。当初の問いは「どうすれば病気を治せるか」でした。ところが現地で多くの人々が栄養失調や感染症に苦しむ姿を見て、彼は別の問いを立てます。「なぜ病気になるのか」。診察を重ねるうちに、原因は医療不足だけでなく、干ばつによる食糧不足や清潔な水の欠如にあると気づきました。そこで中村さんは、さらに問いを深めます。「命を守るために、本当に必要な支援は何か」。その答えとして彼が選んだのは、医療だけでなく、水路を建設して農地をよみがえらせることでした。「100の診療所より1本の用水路を」を合い言葉に、大きな川から水を引く用水路を住民と共につくり、砂漠のようだった土地を緑に変えていったのです。これは、最初の問いにとどまらず、現実を見つめ直し、問いを更新し続けた結果でした。『問いを立てる力』とは、目の前の問題をそのまま受け取らず、「本当の原因は何か」「別の見方はないか」と考える力です。問いが変われば、行動が変わり、結果も変わります。中村さんの実践は、問いを立てる力が社会を動かし人々の命を救い社会を動かす力になることを、静かに、しかし力強く示しているのです。

結びに中村さんの葬儀での息子さん中村健さんの言葉を紹介します。

私自身が父から学んだことは、家族はもちろん人の思いを大切にすること、物事において本当に必要なことを見極めること、そして必要なことは一生懸命行うということです。私が20歳になる前はいつも怒られていました。「口先だけじゃなくて行動に示せ」と言われていました。「俺は行動しか信じない」と言っていました。父から学んだことは、行動で示したいと思います。この先の人生において、自分がどんなに年を取っても父から学んだことをいつも心に残し、生きていきたいと思います。

私達が中村さんから学ぶべきことのエッセンスが、息子さんの言葉に込められているように思えます。



図書館からのおすすめ絵本




図書館では、家族と一緒に本を読むことで、読書に親しんでもらうとともに、家庭内のコミュニケーションを深めることを目的とした「家読」(家庭読書)を推進しています。こどもも大人も楽しめる、家読にぴったりの絵本をご紹介します♪



『ねこはるすばん』
町田 尚子
ほるぷ出版

『ねこはるすばん』

こんな人におすすめ

猫の秘密を知りたい人 

にんげんが出かけて行ったあと、猫たちは何をしていますか？
いい子に留守番をしているのかと思いきや…実は猫には秘密がありました。
猫は、にんげんが出かけて行ったのを確認すると、こっそりとタンスの中へ。2本足で歩いたかと思ったら、カフェでお茶して、床屋で身だしなみを整えて…。ヒゲのむくま、気の向くまま。猫は私たちが思っていたよりずっと忙しいようです。
対象は、4, 5歳から猫好きな大人まで。町田尚子さんが描く猫の表情にも注目です。皆さんの猫は、どんなお留守番をしているのかな。

※この本は、滑川町立図書館に所蔵があります(貸出中のときは予約ができます)

文化財シリーズ!
第11回

「滑川町の歴史」 part11

古墳時代の滑川町～古墳時代のお墓(古墳)～

古墳時代には、時代の名前にもなっている古墳と呼ばれる土を高く盛り上げて造る古代の権力者の墓が出現します。古墳は、大王の墓として出現し、次第に地方豪族や豪族を支える有力者の墓として各地に造られました。

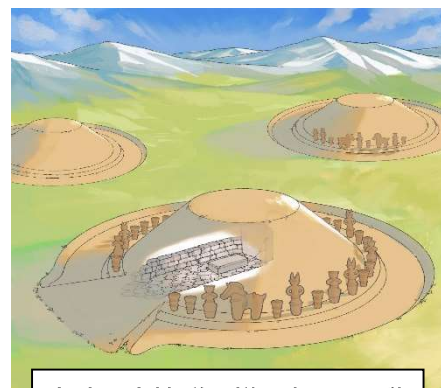
古墳には色々な種類があり、その形から前方後円墳や円墳などと呼ばれますが、造られる古墳の形や大きさは、埋葬される人の地位や権力によって変わりました。また、古墳には死者とともに須恵器や金属器などが埋葬(副葬品)され、古墳時代中期～後期には埴輪が並べられました。

滑川町でも、県選定重要遺跡の月輪古墳群(月の輪地内)や町指定史跡の円正寺古墳群(土塩・福田地内)、発掘調査が行われている廓古墳群(伊古地内)や柴山古墳群(和泉地内)など、地元の有力者層の古墳が町内各所に造られたことが確認されています。

中でも、現在の月の輪地区の区画整理に伴って発掘調査が行われた月輪古墳群では、100基を超える古墳が確認されています。うち、古墳59基(円墳54基、帆立貝形古墳5基)が調査され、5世紀後半から7世紀初頭に造られたことが分かっています。

★月輪古墳群出土の副葬品(須恵器・鉄製品)の一部をエコミュージアムセンターにて展示します!

○展示期間:1/6(火)～2/1(日)
10:00～17:00
(毎週月曜日、1/13、1/18は休館日のため休展)



当時の古墳群の様子(イメージ)



月輪古墳群発掘調査風景



月輪古墳群発掘調査時の空撮